

令和元年6月28日現在

機関番号：87111

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16882

研究課題名（和文）古代大宰府における官衙の動態と空間分析

研究課題名（英文）The analysis of Government office and space in Ancient DAZAIFU

研究代表者

岡田 諭 (Okada, Satoshi)

九州歴史資料館・文化財調査室・研究員（移行）

研究者番号：30711585

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：大宰府政庁および周辺官衙の遺構図面データをCADデータに統合し、区画施設等の遺構を計測した結果、政庁周辺官衙の区画は、期政庁の中軸線を基準として設計されており、政庁前面広場の西側の溝のみ政庁中軸線から360小尺の間隔で設定され、それ以外は区画の幅が300小尺になるように設定されていることが推察できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の研究の学術的意義は、これまで地区毎に報告がなされた大宰府政庁周辺官衙の遺構図面を統合して、政庁周辺官衙の成立過程を分析できたことである。
また、大宰府政庁周辺官衙の研究を通して大宰府史跡の解明に貢献できたことは、広く一般国民の大宰府史跡に対する関心の高まりに応えることにもなり、社会的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：As a result of integrating remains drawing data of the Dazaifu Government and surrounding officials into CAD data and measuring the remains of district facilities, etc. It can be inferred that only the ditch on the west side of square on central government office is set at an interval of 360 SHOSHAKU from the central axis of the government office, and the other width of the section is set to be 300 SHOSHAKU.

研究分野：日本考古学

キーワード：大宰府 CAD 遺構 官衙 尺

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

九州歴史資料館では 2002 年の大宰府政庁跡正式報告書刊行以来、大宰府政庁周辺官衙跡についても順次刊行され、大宰府中枢の様相が明らかになりつつある。一方、条坊域については井上信正氏の 90m 条坊案が提唱され、大宰府研究は官衙域と条坊域の一体的な研究が必要な局面に入っている。そこで、地区毎の報告に分かれている政庁周辺官衙跡の全体を俯瞰する基礎データの作成し、大宰府史跡で確認された遺構群が同一の基準の下で検討されるべきであると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大宰府政庁周辺官衙と条坊域の遺構群の位置情報を同一のデータとして扱うための CAD データを作成し、大宰府政庁周辺官衙各地区の遺構の分布と計測をおこなうことで、官衙群相互の関係を整理し、大宰府史跡の遺構の動態を考察することである。合わせて、作成した CAD データは今後の発掘調査で得られる遺構図面を順次追加し、研究を発展させるための基礎データとする。

3. 研究の方法

(1)福岡県が平成 14 年度に実施した大宰府関連資料のデジタルデータ化事業によって作成された現場で実測した紙図面を 200dpi の JPEG 画像を AutoCAD Raster Design を用いて、補正し、実寸法を与える。

(2)AutoCAD で平面直角座標系に合わせた位置に配置し、図面を合成する。

(3)政庁正殿・中門・南門の中心を割り出し、政庁中軸線を設定する。

(4)政庁前面域の区画施設を抽出し、政庁中軸線からの距離を測定して区画の設計尺を検討する。

(5)各地区の官衙建物と区画との関係を計測によって分析する。

(6)上記の計測・検討結果を基に政庁周辺官衙の成立過程を検討する。

4. 研究成果

(1)基礎データの作成

本研究では大宰府史跡の遺構平面実測図のデジタルデータを統合し CAD 上で運用することで、広範囲に及ぶ遺構を高い精度で計測することが可能になり、大宰府史跡の遺構分析を目指すものである。精度の高いデータを作成するには、元となる図面の精度も高くなくてはならない。発掘調査では通常 1/20 の縮尺で実測するため、1/20 の図面データを用いるべきだが、発掘調査の初期の頃は平面直角座標系の座標が実測図に記載されておらず、座標計算を経なければ、CAD で補正することもできない。そこで、正式報告書に掲載するために座標計算された図面を合成し、基礎データを作成した。なお、現在調査中の蔵司地区の測量委託データも合成している。(図 1)

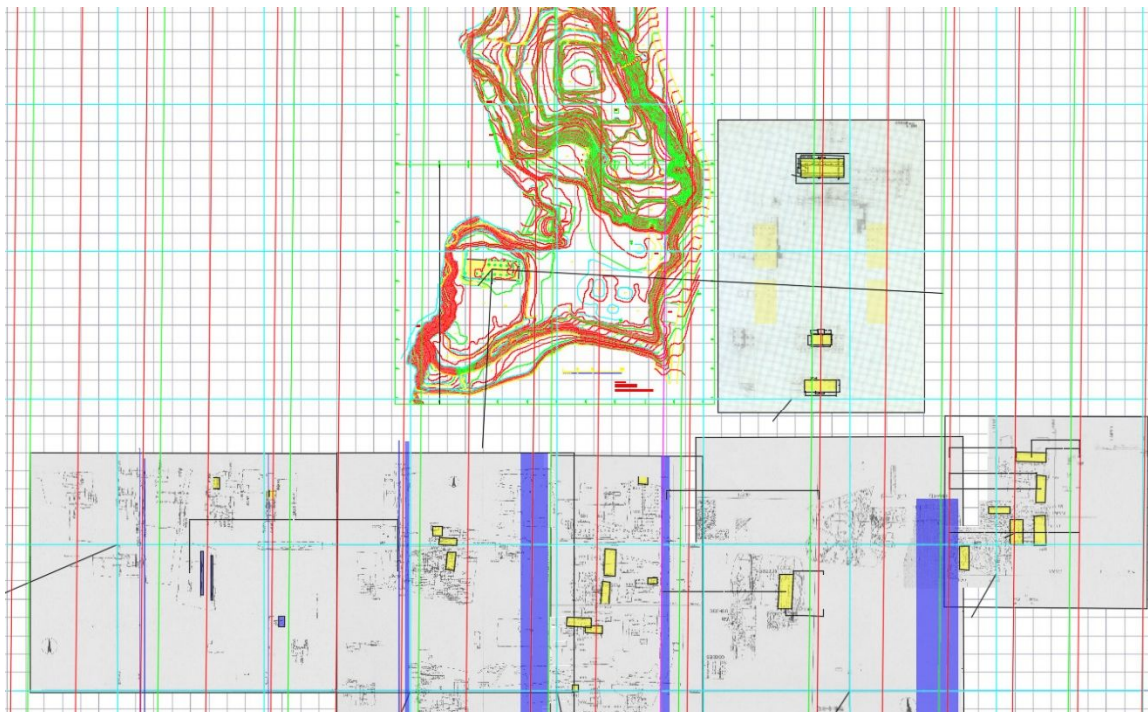


図 1 大宰府史跡遺構図面統合基礎データ

赤線 = 300、150 小尺設計線、紅線 = 360、180 小尺設計線、緑線 = 条坊施工線、
藍線 = 平面直角座標系座標、青 = 区画溝、黄 = 8 世紀前半までの主な建物

(2) 政庁中軸線

研究方法で述べたように政庁正殿・中門・南門を貫通する中軸線を割り出した。報告書の計測データを参考に設計当初の建物規模を推定し、その寸法で矩形を描画する。そして矩形を図面に配置し、中心を結んで中軸線とした。結果は各建物の中心がほぼ一直線上に並び、軸の振れは、座標北に対して東に0度34分23秒であった。この値は『太宰府市史』考古資料編 P.345 第6図に記載されている数値とほぼ同値である。

(3) 区画施設と地区割と 300 小尺の設計線の抽出

近年井上信正氏によって大宰府の条坊地割として 90m 案が提示されている。90m 案は 250 大尺 (88.8m) の間隔で条坊設計の基準線を配置し、条坊施行時期は政庁 期に遡る。政庁 期は小尺設計であるため、和銅六 (713) 年の大尺廃止以降の設計施工である。そこで、まず、CAD 上に政庁中軸線と並行して 300 小尺 (88.8m) で仮定の基準線を設定したところ、溝の中心や肩ではないが政庁前面域と日吉地区を区画する SD4660 に一致した。一方、政庁前面域以西の区画施設とは一致しなかった。政庁前面域の西限 (= 不丁地区の東限) である溝 SD2340 と政庁中軸線との距離は、報告書の記載によると 102.4m である。小尺の整数値の近似値は 360 小尺 (106.56m) であり、政庁中軸線から 106.56m の距離に仮定の基準線を設定すると SD2430 と一致する。また、不丁地区の西限 (= 大楠地区の東限) である SD320 と SD2340 間は報告書の記載では 87m であるが、小尺の整数値の近似値は 300 小尺 (88.8m) である。そこで、SD2340 以西に 88.8m 間隔で基準線を仮定すると不丁地区の SD320 と一致し、順次西に向かって、大楠地区の西限である SD2680 と SD2700 の間、広丸地区の SD530 と SD3939 の間、SD2840 と SD4118 の間に基準線が通る。なお、広丸地区の SD2785 と SD2786 の間には 300 小尺間隔の基準線の間線が通る。

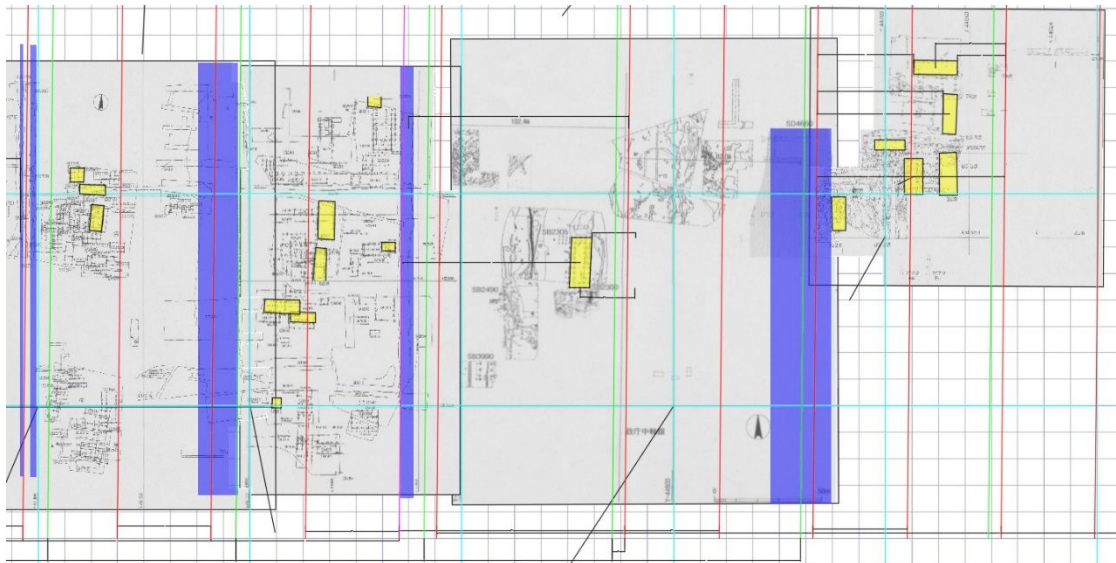


図 3 日吉地区~大楠地区官衙の地区割と設計線

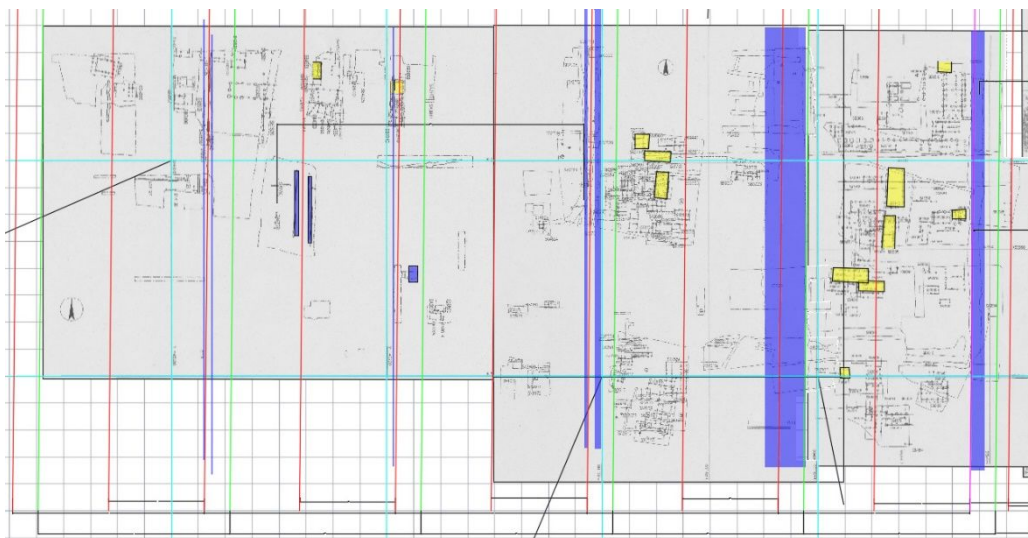


図 2 不丁地区~広丸地区官衙の地区割と設計線

(4) 政庁周辺官衙の地区割についての考察

政庁中軸線から各官衙区画の区画溝までの距離を計測した結果、政庁中軸線から東は 300 小尺間隔で地区割がなされていると想定される。一方、政庁中軸線以西は一本目が SD2340 の 360 小尺、二本目以降は SD2340 から 300 小尺間隔で地区割の基準線が配される。従って、政庁南側の周辺官衙群は当初から各官衙区画を一体的に設計していたと考えられる。

ここで、問題となるのは、政庁前面広場が政庁中軸線に対して左右非対称になる点である。政庁前面広場地区の報告書では条坊施工基準線が政庁中軸線に対してズレが生じている点に着目し、推定条坊ラインが政庁南側の区画の基準になると推測された。しかしながら、政庁前面広場東限の溝 SD4660 は幅が広いと、推定条坊ラインも 300 小尺間隔の基準線も溝の範囲に重なるが、政庁中軸線の西側は推定条坊ラインに近接するのは SD2340 のみであり、それ以外の区画と合致しない。政庁周辺官衙群が 期政庁と一体的に整備されたとすると、推定条坊ラインが官衙区画の基準にはならないと考えられる。

各官衙区画の東西幅に着目すると、政庁前面広場以外は 300 小尺間隔で設計されていることが分かった。大宰府の実務機関の組織体制の在り方を考える上で重要な視点かもしれない。政庁前面広場が中軸線に対して左右非対称の設計をとった理由については今後も検討を重ねなければならない。

(5) 国内外における位置づけとインパクト

政庁周辺官衙の各地区の研究は発掘調査報告書の刊行によって徐々に明らかになってきているが、広範囲にわたる官衙群全体を分析し、を研究する上では CAD を利用することが効果的であることが分かった。同様に古代官衙遺跡のような大規模遺跡では関連遺構が広範囲に分布するため、建物配置や地区割等を分析するには CAD が効果的である上、記録としても活用が期待できる。

(6) 今後の展望

今回の研究で用いたデータは当初想定していた 1/20 縮尺の実測図ではないため、計測値の精度は高くない。しかし大まかな傾向が掴めたので、今後は 1/20 縮尺の実測図を基にした CAD データを作成しなければならない。また、継続的に行われている発掘調査データを活かし、政庁周辺官衙の成立過程を明らかにしていきたい。

< 引用参考文献 >

- 九州歴史資料館、大宰府政庁跡、2002
九州歴史資料館、大宰府政庁周辺官衙跡 政庁前面広場地区、2010
九州歴史資料館、大宰府政庁周辺官衙跡 日吉地区、2011
九州歴史資料館、大宰府政庁周辺官衙跡 不丁地区 遺構編、2012
九州歴史資料館、大宰府政庁周辺官衙跡 不丁地区 遺物編 2、2014
九州歴史資料館、大宰府政庁周辺官衙跡 大楠地区 総括・図版編、2017
九州歴史資料館、大宰府政庁周辺官衙跡 広丸地区 遺構編、2017
井上信正、大宰府条坊について、都府楼 40、2008
太宰府市、大宰府市史、考古資料編、第四章 天下の一都会、1992

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

なし

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：井上 信正 (太宰府市教育委員会)

ローマ字氏名：Inoue Nobumasa

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。